

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2017年度第1回研究会（通算第4回目）

日時：2017年7月8日（土）14:00-19:00, 2017年7月9日（日）9:30-13:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階

主催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」

出席者：鶴田格、石川博樹、深澤秀夫、安溪貴子、石山俊、小松かおり、坂梨健太、末原達郎、杉山祐子、田中利和、藤本武、加藤珠比、坂井真紀子、足達太郎、四方篝、寺内良平、小谷真吾

発表1：寺内良平（京都大学）

「ギニアヤムの多様性と起源の解明に向けて」

西アフリカの根菜農耕文化を支える重要な作物がギニアヤム(*Dioscorea rotundata*)である。ギニアヤムは、西アフリカで独自に栽培化された。世界に約10種あるヤマノイモ属(*Dioscorea*)栽培種(ヤム)の内、生産量において最も重要な種と考えられる。ギニアヤムには、シロギニアヤム(*D. rotundata*)、キイロギニアヤム(*D. cayenensis*)が知られており、この2者の系統関係、さらに近縁野生種との関係には不明の点が多い。発表者は、ヤム全般の多様性と起源に興味をもち、遺伝学的手法を用いた研究を継続してきた。葉緑体DNAおよび核リボゾームDNAの変異の解析から、シロギニアヤムが、*D. abyssinica*、*D. praehensilis*、*D. liebrechtshiana*のいずれかの野生種から直接栽培化され、キイロギニアヤムが、おそらく雑種起源であること、すなわちシロギニアヤムあるいは上記野生種の何れかの種と、*D. burkilliana*、*D. minutiflora*、*D. similasifolia*、*D. togoensis*の何れかの種の交配によって成立した可能性を示唆した(Terauchi et al. 1992, TAG 83:743)。ギニアヤムの詳細な遺伝解析を進める目的で、全ゲノム解読を実施した。ギニアヤムゲノムは、2倍体で40本の染色体を持つ(2n=40)。ゲノムサイズは、約570Mbで、その上に2万個以上の遺伝子が予測された。今後、全ゲノム情報を用いたギニアヤムの系統解析を進展するものと期待される。

発表2：小谷真吾（千葉大学）

「サツマイモの導入は農業革命だったのか：ニューギニア在来農耕の歴史と分布からの分析」

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

近年、カレントアンソロジー誌上で改めて議論が喚起された、人類史における農耕多元論をベースに、ニューギニアにおける農耕の変化と現状を論じた。まず、ニューギニアの地理学的、生物学的特徴、歴史、社会について説明を行った上で、主に人類学者によって記述されてきた生業の地域差について紹介した。すなわち、高地地域ではサツマイモ栽培・ブタ飼育、低地地域ではサゴデンプン精製・狩猟採集、海岸地域ではヤムイモ栽培・漁撈、高地周縁ではバナナ栽培、タロ栽培、狩猟採集という地域差である。

1990年代から始まったGISとフィールドワーク融合プロジェクトの成果により、従来レビューによってしか把握できなかった全体像を統一的な方法で分析することが可能になった。結果として、高地地域以外でもサツマイモ栽培が受容されていること、タロイモ、ヤムイモ等の栽培が減少していることが示された。直近50年でも3倍に増えている人口を収容するために、現在ニューギニアの農耕システムは、集約化の進行、組み合わせの変化を伴う「イノベーション」の過程にあることが示唆される。

そのような「イノベーション」は、近年のみならず、約7000年前の農耕の開始、また約300年前のサツマイモ導入の場面でも起こったことが、クック湿地における考古学的調査の知見、及び生態人類学的研究の知見によって明らかにされてきた。特に、サツマイモ導入に伴う人口増加、環境改変、社会変化の拡大再生産は、その過程が「農業革命」であった可能性を示唆する。しかし、人口増加、社会構造の変化は、資料によって追跡可能な直近100年程度の民族誌の蓄積によってしか実証できない以上、現在その過程が進行していると考えられる高地周縁における詳細な調査が求められている。

発表3：藤本 武（富山大学）

「エチオピア西南部のエンセーテの栽培利用にみられるイノベーション」

発表者はこれまでエチオピア西南部の農耕民社会で調査研究を行ってきた。本発表にあたり、そのイモ類の栽培利用を見直したところ、多数のイノベーションがみられることが確認された。今回は主として地域で最も重要な栽培植物であるエンセーテに関して議論を行った。まずその栽培と利用に関しては農法と調理法の集約化として理解できる面がある。人口密度の高い集団では施肥や移植をひんぱんに行い、手間をかけて加工調理を行うなど、人口密度の低い集団に比べて、エンセーテに多くの労力を投下している。ただし集約化の方向性だけでは理解できない面もあり、実はそれこそがエンセーテに関する最も独創的なイノベーションであると考えられる。具体的には根茎などに含まれる澱粉の発酵利用を行うことである。このエンセーテの発酵利用は集約化や必要性によって説明することは困難で謎が多い。本発表ではひとつの仮説として、エンセーテの発酵利用がさかんな地域に同所的にみられるテンナンショウなどの有毒イモ類の毒抜き加工技術が転用された可能性を示唆した。テンナンショウは野生植物であるが、一部社会では収穫後に塊茎上部を埋め戻

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

すなど、半栽培といえるものもあり、これもひとつのイノベーションである。最後にタロイモ栽培にみられるイノベーションを手短に紹介した。